

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 「お手紙」（アーノルド・ローベル）をどう読むか：挿絵も読みながら、「親友」を探る |
| Author(s) | 遠藤, 瑛子 |
| Citation | 国語教育思想研究, 21 : 100 - 81 |
| Issue Date | 2020-10-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050401 |
| Right | |
| Relation | |



「お手紙」(アーノルド・ローベル)をどう読むか

―挿絵も読みながら、「親友」を探る―

元同志社大学講師 遠藤 瑛子

一はじめに 研究の動機

神戸大学発達科学部附属住吉中学校を退職(二〇〇三)後、同志社大学文学部で国語科教育法を教えるようになってから、中学校だけでなく小学校の国語の指導助言を依頼されることが多くなつた。

新任の教師が一つの学校に何人も着任し、指導主事だけでは授業力向上に手が回らないというのが、当時(二〇〇三年頃から数年)の実情だった。ここに取り上げる小学校二年生の「お手紙」の授業の助言は、その一例である。私自身、それまで小学校教科書に「お手紙」が掲載されていることすら、現職のときには知らなかった。

私の、初めての「お手紙」の授業観察では、挿絵にいつさい触れない本文の読解だった。つまり、がまくんとかえるくんとの想像できる心情や言葉の解釈だったように記憶している。ふたりがお手紙の来るのを待つ姿が変化しているのに、それを取り上げず、私が指摘して初めて気がついたようだった。

私自身、「見(観)る」ことを国語の授業(総合単元学習)に取り入れてきた経験から、言葉、表現と挿絵は大いに相関関係があると考えた。まして、この作品の場合、文章も挿絵もアーノルド・ローベルによるものである。その後、何度もこの「お手紙」

の学習を見せてもらった。徐々に、教師はふたりがポーチに座っている二種類の挿絵のコピーを黒板に貼って、視覚からも心情の深い読みを導くようになった。また、アーノルドの他の本を読ませての読書紹介を発展として行ったり、全文暗唱のすばらしく、まい音読劇を演じたりした学習もあった。(強調点筆者)

一昨年(二〇一八)、神戸大学附属小学校の研究発表会で、二年生担任の藤中寛子教諭の指導助言を依頼された。浜本純逸神戸大学名誉教授と一緒だったので、私は実践者の立場、つまり、国語科総合単元学習の立場で教材(学習材)研究を行って、当日に臨むことにした。それが「お手紙」を深く読む発端である。

私は、「お手紙」所収の『ふたりはともだち』をとり急ぎ図書館で借り、繰り返し読んだ。その中で、教科書を読んでいたときから気になっていたかえるくんの手紙の「親友」を、二年生が理解できるのだろうかという思い(疑問)が大きく膨らんできた。もう一つハツと気づいたことがある。がまくんを訪れたかえるくんの上着である。この上着は、「なくしたボタン」の話の中で、がまくんがボタンを縫い付けたものを、かえるくんにあげたものである。なぜ、それを着て訪問したのだろうか。

この経緯は教科書だけでは全くわからない。しかも、がまくんはパジャマ姿である。

発表会当日、藤中教諭はお手紙を託すのが、「かたつむりくん

でなく、〇〇だったら」を行った。私は『ふたりはともだち』の中の第五話「おてがみ」は、他の「なくしたボタン」「すいえい」との関連の重要性を説明したので、以下、それを追究していきたい。

ふたりの上着の変化の意味を考えることは、ふたりの行動と心情(気持ち)を文章と挿絵から推察でき、先の疑問の解決につながることになる。特に、「親友」関係を解き明かすことができる。そこで、参考資料から始めたい。

二、「ふたりはともだち」の作品研究

1. 参考資料(算用数字はアメリカでの発行年)

- ① 光村図書『こくご』(二下 赤とんぼ) から「お手紙」
光村図書 学習指導書
- ② A 平成二十七年(二〇一五年)
B 令和二年(二〇二〇年)
- ③ 『ふたりはともだち』(アーノルド・ローベル作 三木卓訳 文化出版局 ミセスこどもの本 一九七二年 1970)
- ④ 『ふたりは いっしょ』
(③に同じ) 一九七二年 1971 1972)
- ⑤ 『ふたりは いっしょ』(③に同じ) 一九七七年 1976)
- ⑥ 『ふたりは きょうも』(③に同じ) 一九八〇年 1979)
- ⑦ 『月刊 MOE』(白泉社 二〇一五年八月号 通算四三〇号)
- ⑧ 『ふたりはともだち』Frog and Toad Are Friends
・娘のエイドリアンさんが語る 優しかった父ローベル
・「がまくんとかえるくん」の愉快で深い名場面



- (アーノルド・ローベル作 三木卓訳 ラボ教育センター 二〇一五年)
- ⑨ 小中連携国語科学習指導のための一考察
―物語教材の系統性の検討を通して―
二〇一一 大阪教育大学 住田勝(第二二〇回 全国大
学国語教育学会 発表資料)

2. 『ふたりはともだち』の表紙

声を出して本を読んでいるがまくん。上着はポツポツ模様のグリーン。聞いているかえるくんの上着は茶色である。聞いているかえるくんは足が長く、がまくんよりスマートに描かれている。

3. 『ふたりはともだち』のめくへ

| | |
|-------|------|
| はるがきた | (緑色) |
| おはなし | (茶色) |
| なくした | (緑色) |
| すいえい | (茶色) |
| おてがみ | (緑色) |

※原書はすべて横書きで、
() 内の色は、文字の色

挿絵については、著作権の関係上掲載できないため、以下にその特徴を挙げておく。目次の挿絵では、がまくんは右に腰かけて、きのこの下でかえるくんに読み聞かせている。(他の本でもがまくんの読書する姿は目次に出てくる。それに対してかえるくんは寝ころがって聞いている姿である。ふたりとも樹の上で夢中になつて読書している絵もある。)

4. 学習指導書(光村図書)における挿絵の取り扱いについて

「お手紙」は音読劇という言語活動を通して、物語の場面やかえるくん、がまくんの行動と心情を理解させることをねらつて、次のような指導目標が提示されている。

(1) 「お手紙」の指導目標

【平成二十七年(二〇一五年)版】

「身につけたい力(指導目標)」

◎場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、声の出し方などを工夫して音読劇をすることが出来る。(読(1)ア・ウ・オ)

○手紙を書く楽しさを知り、物語の登場人物に言つてあげたいことを手紙に書くことが出来る。(書(1)ア・イ)

・物語を読み、自分の経験と結び付けて、感想を発表し合うことが出来る。(伝(1)イ(カ))

【令和二年(二〇二〇年)版】

【指導目標】

◎語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読することが出来る。(知(1)ク)

◎場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することが出来る。(思(1)エ)

○文章を読んで感じたことや分かったことを共有することが出来る。(思(1)カ)

二つの指導目標を比較すると、想像することは共通するが、令和版の方がより音読に傾斜している。その上、書く活動がなくなっている。学習指導要領に依るところが大きい。(傍線筆者)

(2) 挿絵の取り扱い

挿絵については、平成二十七年版の方が「挿絵を読む活動」として次のように書いている。

p 8・9と p 16・17の挿絵は、同じお手紙を待つ場面であ

るが、二人の表情に違いがある。この二点の違いは、二人の心情の変化と、その原因となった出来事について考えるうえで重要である。挿絵を、単に場面の転換を表すものとして捉えるのではなく、がまくんとかえるくんの微妙な心の動きを表す文章と対応させながら、大切に読み取らせたい。

出した手紙がなかなか届かず、今か今かと待ちわびているかえるくんは、ついに窓から身を乗り出して手紙を待つ。文章には、「かえるくんは、まどから のぞきました。」としか表現されていなが、挿絵と合わせて読み取ること、かえるくんがどれほど手紙を待ち望んでいるかを読み取ることができるだろう。

また、かえるくんから「ぼくが、きみに、お手紙出したんだもの。」と言われ、「きみが。」と喜ぶがまくんの心情も、挿絵の表情を読み取ること、想像できる。

作者のアーノルド・ローベルが、挿絵も描いていることに、この作品の特徴がある。挿絵も有効に活用したい。

(傍点傍線 筆者)

「はじめに」のところで書いたが、挿絵のふたりの表情の違いに着目した授業とそうでない授業とでは、学習者のふたりに対する嬉しさ、幸せの理解が違っていたように思う。文章を読み、絵を読むこと、またその逆でも納得度が上がり、読者である学習者がふたりになりきり、幸せのお裾分けに預かる、つまり、同化できるのではないだろうか。

令和二年版ではどうなっているのだろうか。

ここでは、特に「挿絵を読む活動」の項目は挙げられていない。「たいせつ」の項には、次のように記されている。

学習を終えて、言葉や挿絵から登場人物のしたことや様子を想像できることを再確認する。また、登場人物のその言動の理由を考えることで、より物語を深く理解できることに触れる。「お手紙」は作者が絵を描いているため、挿絵を有効に活用することができ。ただ、言葉による見方・考え方を働かせる国語科であるので、挿絵はきっかけや補佐的な役割として考え、叙述を中心に読むようにしていきたい。

(傍線筆者)

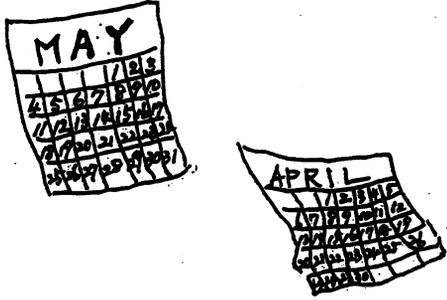
とある。叙述を中心に読むことは当然である。平成版で二人の表情の違いを「がまくんとかえるくんの微妙な心の動きを表す文章と対応させながら、大切に読み取らせたい」(傍点筆者)と記述されていることを考えると、「見る(観る)こと」が令和版では一歩後退しているのである。音読中心の取り上げ方になっている。そうなると、当然『ふたりはともだち』の表紙並びに初めにふたりが着ていた上着と「おてがみ」「お手紙」でがまくんの家を訪れたかえるくんの着ている上着、がまくんのパジャマがなぜ今までと違うのか気づくはずはない。

なぜ、かえるくんはボタンのたくさん着いた上着を着ているのか。この疑問を明解にするためには、先に挙げた目次に沿って、内容を追う必要がある。挿絵は著作権の関係上、掲載できないので、その話の重要な道具を図で示す。また、「親友」とあるので、「ともだち」の観点からふたりの行動と心情を抜き出して、第五話までどのように変容するのかを次に示してみよう。

5. 『ふたりはともだち』の構成

(○要約 □かえるくん ●がまくん)

第一話 はるがきた

| | |
|--|-------------------|
| <p>季節・場所・重要な挿絵</p> | <p>ともだちとしての表現</p> |
| <p>○ まだ眠っている（冬眠中）がまくんをかえるくんが起きて、ふたりに春が来ていている様子を調べるため、外に出る。</p> | |
| <p>・春 がまくんの家</p> | |
| <p>・がまくんの家のカレンダーを破いて五月にしたかえるくん</p> | |
| <p>□ 「ぼくたちの あたらしい一ねんが また はじまったって こと なんだ。」</p> <p>□ 「それじゃ それまで、ぼく さびしいよ。」（傍点筆者）</p> <p>☆草原、森、川、晩の星等におもしろいことがあることをつけるかえるくん</p> | |
|  | |

五話からなる物語の第一話の「はるがきた」は、がまくんの家をかえるくんが訪ねるところから始まる。彼は大急ぎで走ってがまくんの家をノックするのである。挿絵では、屋根や庭の物陰、塀のそばにまだ雪が残っている。この第一話だけ、春が来た喜びの情景描写がある。

・お日さまが きらきらして
 ・きらきらする ひなた
 ・四月の すきとおった あたたかい ひかり
 「ぼくたちの、あたらしい、一ねんが、また、はじまった」(傍点筆者)ことや「ぼく、さびしいよ」から、去年もふたりは友だちでよく一緒にいたことが想像できる。「あたらしい、一ねん」からふたりに楽しみたいという期待感をもっているかえるくんの訪問の意図が見えてくる。
 しかし、そのため、十一月から破られていないがまくんのカレンダーをどんどん破って、実際よりも一ヶ月早い五月にしてしまう。咄嗟の行動。かえるくんの策略である。知恵がある。がまくんはベッドから跳び起きるのでなく「はいおり」てくる。まだ眠そうだ。
 そして、ふたりは春の世の中を調べに行くのである。草の根元には雪が残っている挿絵がある。次の第二話の「おはなし」を第一話のように書いてみよう。

第二話 おはなし

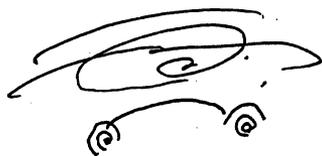
| | |
|---|-------------------|
| <p>季節・場所・重要な挿絵</p> | <p>ともだちとしての表現</p> |
| <p>○ がまくんは自分のベッドに病気のかえるくんを寝かせて、熱いお茶を作ってやる。その上、かえるくんの要望に</p> | |

応えて、身を挺してお話を考えるのである。どんな動作をしても思いつかない。挙句の果て、がまくんは壁に頭をぶつけるので具合が悪くなってしまう。

ベッドに入ったがまくんに、かえるくんはがまくんの動作をすべて繰り返しのお話にして聞かせるのである。

・がまくんの家

・ドシンドシン壁に頭をぶつけるがまくん、調子が悪くなる



●「かえるくん。きみ ひどく
かがおが 青いよ。」

●「ぼくの ベッドで お休み
よ。」

●がまくんは かえるくんに
あつい おちやを 一ぱい
つくって やりました。

□「ぼくが 休んで いる あ
いだに ひとつ おはなし
して くないかい。」

□「がまくん、きみ ぼくの
おはなし ききたいかい？」

□「ふたりの なかよしがお
りました。…かえるくんは
ともだちの がまくんに(以
下略)」

第二話には、かえるくんががまくんの家を訪ねたことは書いていないが、「ぼくの ベッドで お休みよ」から訪問したのがかえるくんということがわかる。いつもよりずっと青い顔色だったかえるくんの体調を気遣うがまくんは、熱いお茶を作ってやり、

かえるくんから頼まれた「おはなし」を考えようとする。座って考え、ぶらぶらして考え、逆立ちをして考えても思いつけなかった。さらに水を頭に何杯も何杯もかけ、それでも思いつけなかったので、壁に頭をドシンドシン、ガンガンぶつける。そして、彼の調子が狂ってしまうのである。つまり、がまくんは自分を痛めつけてまでして要望の「おはなし」に、答えようとする。投げ出さない。(傍点筆者)

いっぽう、元気になったかえるくんはこの動作を昔話にして調子が悪くなったがまくんに一部始終話して聞かせる。残酷である。かえるくんの話のページは詩のリズムのように「がまくんは…」「おはなしを…」と繰り返される。がまくんは怒りもせず、眠ってしまふ。

しかし、ここで初めて、かえるくんの話の中に、「ふたりのなかよし」「かえるくんは ともだちの がまくんに」と出てくるので、かえるくんはがまくんをどう思っているかがわかる。

第三話 なくした ボタン

季節・場所・重要な挿絵

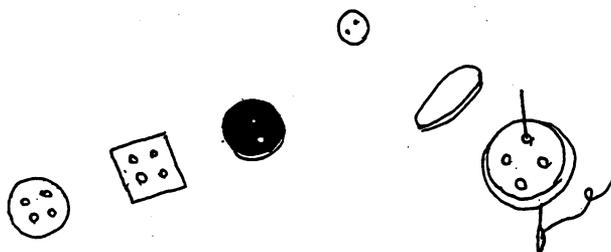
ともだちとしての表現

○ ふたりは、草原を横切り、森の中を歩き、川のそばを歩いてがまくんの家に戻り着く。そこで、がまくんは上着のボタンをなくしたことに気づく。かえるくんの提案で戻って探すのけれど、ボタンは次々に見つかるがいづれも上着のボタンではなかった。がまくんはヒステリックに怒り心頭。しかし、家に帰ってみると、探していたボタンが落ちていたのである。そこで、がまくんは今までのボタンを全部縫い付け

て、翌日、世話になったかえるくんがこの上着をあげてしま
う。

※
がまくんの探しているポタン

丸くて穴が四つ 大きくて
丸くて厚いポタン



●「ぼく、足に けがをした
だけじゃ ないんだ。うわぎ
のポタンを 一つ なくし
ちゃった。」

□「しんばい、ごむよう。」

□「ぼくたちの とおつて き
たところを のこらずも
どつて あるいてみよう。じ
きに みつかるとよ。」

☆拾ったポタン

- ・かえるくん↓黒い
- ・すずめ ↓穴が二つ
- ・かえるくん↓小さい
- ・あらいぐま↓四角い
- ・かえるくん↓うすい

●「ポタンは、ずっと ここに
あったんだ。ぼく、なんて
かえるくん、めんどうを
かけて、しまったんだろ
う。」

□かえるくんは、うわぎを
きて、うれしくて、びよん
びよん はねました。

第三話が、第五話「おてがみ」に出てくるかえるくんの上着の
出所、理由になる。

ここでは、かえるくんは冷静で、がまくんのなくしたポタン探
しに最後まで付き合っている。しかも、彼は草原、森、川と三カ
所でポタンを見つけている。他にすずめやあらいぐままでポタン
を見つけて差し出すが、いずれもがまくんの求めるものではな
かった。

かえるくんが「しんばい、ごむよう」と言ったのに、自分のポ
タンになかなか出会えないがまくんは感情を徐々に昂ぶらせて
いく。最初は、「そりゃ、ぼくのじゃ、ないな、」とサラッと返答
していたが、違うポタンを差し出されるたび、「さけび」「そりゃ
ぼくのじゃない!」「!」「付きで、」なきごえで、わめき、「五
つ目の薄いポタンをかえるくんが見つけたときには、「ぶんぶん
おこつて」「とんだり、はねたり、きいきいごえを、だしたりし
て」「叫ぶのである。しかも、走って家に帰り、ドアを「びしゃり
と、しめました。」とある。とりつくしまもない。駄々っ子丸出
しである。ところが、家に入ったとたん、足もとに上の表内の「※」
のポタンが落ちていたのである。笑止千万である。

がまくんは、探すことに付き合ってくれたかえるくんへの申し
訳なさに加え、自分の感情爆発での迷惑を思い知っただろう。
ここは二つの挿絵がある。足もとのポタンを加えた六つのポタン
を机の上に並べてみつけるがまくん。もう一つは、一つ一つ上着
にしつかりと縫い付けていく挿絵である。

この二つの挿絵を眺めていると、がまくんの気持ちの静かに伝
わってくる。針箱をそばに置いて一つ一つ縫い付けていく時間の
中で、がまくんはきつと落ち着きを取り戻して考えるはずだ。
かえるくんはひと言も文句を言わずに探してくれたのに、自分
は、なんて自分中心だったのだろう。

がまくんは恥ずかしさや友達のありがたさを自覚し、かえるくんの好意に結論を出したのである。だから、次の日、かえるくんに想いのつまった上着をあげた。かえるくんは喜んでもらったのである。

かえるくんが跳びはねて喜ぶ様子の挿絵では、ホツとして満足した表情のがまくんが描かれている。ふたりの心の距離は近づいたかに見える。

冷静沈着で少しばかり知恵者のかえるくん像と、人はよいが感情に走ってしまうがまくん像が少し明確に表れている第三話である。

第四話 すいせい

季節・場所・挿絵

ともだちとしての表現

○ がまくんとかえるくんは川で水泳をする。がまくんは水着を着るが、「とても おかしな かつこうに 見える」とを自覚している。かえるくんに見えないように頼む。水に飛び込み、ふたりは昼から晩まで楽しく泳ぐ。そこへかめやとかげ、へび、とんぼ、のねずみまでやってきて、がまくんの水着姿を見ようとす。長い間、水につかっていたがまくんは冷えて震え、くしゃみが出始める。我慢ができなくなつたがまくんは川から上がる。ポタポタと水着から水がしたり落ちる。

待っていたかめ、とかげたち、へび、のねずみは大笑いする。それだけでなく、かえるくんもわらってしまう。がまくんは水着姿の自分を笑つたかえるくんのことばを聞き、家に帰ってしまうのである。

・夏
・川
がまくんは夏用の上着を着用している。

・水の滴り落ちるがまくんの水着



- 「ぼくが みずぎを きたら 水にはいつて しまふまで 見ちゃいけないよ。」
- 「なぜ いけないんだい？」
- 「だって、ぼく みずぎを きると、とても おかしな かつこうに見えるんだ。だからさ。」
- かえるくんは 見ないように 目を つぶりました。
- 「のぞかないでね。」
- 「かめくん」 きみ あっちへ 行って ほしいんだけど。」
- 「…おかしな かつこうに 見えるつて おもっているんだよ。」
- そして、かえるくんも わらつたのです。
- 「だって、みずぎがたの きみはほんとに おかしな かつこうなんだもの。」
- 「そうに きまつてるじゃないか。」

第四話で重要なのは、かえるくんも笑つたことである。第三話で、かえるくんの好意への償いとして、がまくんは自分の上着を

プレゼントするぐらいの間柄になっていたからこそ、水泳にふたりで出かけたのである。がまくんは裸の体つきに自信がないだけでなく、泳ぎも遅い。(がまがえるの習性)にもかかわらず、屋から晩まで泳いで楽しんでる。それは、コンプレックスを忘れることができるぐらい楽しかったらう。水着に着替えるときに、念を入れて「のぞかないでね」と頼んでいたがまくんからすると、何もかも忘れられるぐらいだったに違いない。

友達になつてゐるふたりだからこそ、がまくんを想い、「…おもっているんだよ。」と少し同情的に、しかし寄り添った気持ちでかめに伝えている。

さらに、川のほとりにやってきたとかげにも見えないように伝えていく。しかし、かえるを食べるへびが意地悪く「わしも そいつを 見たいもんだて。」と言う。前の、かめやとかげと明らかに違うのは、一人称「わし」を使い、「そいつ…だて。」と見下したような老獪さが出ている大人のへびとして表現されている。挿絵では、鋭い目つきと舌を出している獲物をねらった顔のへびである。とんぼも、のねずみも見たがっているのに、それを伝えるが、彼はがまくんを助けることができない。嫌がっている水着姿を見ようとすものたちに「おねがいだ。」と叫んでも誰も動こうとしないのである。そして、水から上がったがまくんを見て、

かめは わらいました。
とかげたちは わらいました。
のねずみは わらいました。
そして、かえるくんも わらったのです。

この最後の一行は強烈な一撃である。午後の楽しいふたりの時間が台なしになってしまった。友達関係は決裂である。「そして、」

と一呼吸置いて「かえるくんも」(強調点筆者)と他の動物と同様に扱い、「したのです。」と断定表現を使っている。かえるくんだけは笑うべきではなかったのに、笑ってしまったと、読者に残念な思いをつけている。

このあと、がまくんはかえるくん「そうに きまつてるじゃないか。」と言うだけで、あとは何も言わずに帰ってしまう。友達だと思ふからこそ自分が見せたくない気持ちの理由を伝えたのに、裏切られた哀しさで着替えもせず帰ってしまうのである。水から上がったがまくんと大笑いしている見物の動物たちの挿絵は対面ページになっている。へび、かめ、のねずみは大口を開け、とかげに至るや笑いころげているのである。さすがかえるくんはしまったというしぐさで開いた笑いの口を押さえているが、笑ったことには変わりない。

右の四行だけではわからないところである。いよいよ「おてがみ」になる。

第五話 おてがみ

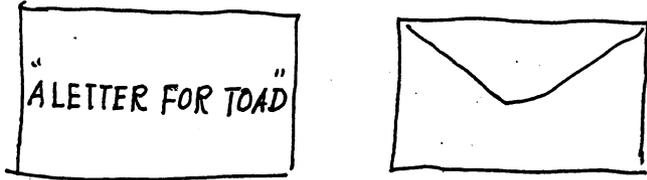
(1) かえるくんの訪問

季節・場所・挿絵

ともだちとしての表現

○ がまくんからもらった上着を着て、がまくんの家を訪ねたかえるくんは、玄関の前(ポーチ)に椅子を出して腰かけているがまくんにどうしたのかと尋ねる。がまくんは一日のうちの悲しい時で、お手紙を待っているがもらったことがないことを伝える。そのままふたりは寄り添って座っているが、しばらくしてかえるくんは家に大急ぎで帰る。

そして鉛筆と紙を探し出し紙に何か書き、封筒に入れ宛名を「がまがえるくんへ」とする。それを知り合いのかたつむりくんに託す。かえるくんはがまくんに手紙の文言を伝え、かたつむりくんが配達してくれるのをふたりで待ち続ける。四日目にかたつむりくんから届いた手紙の文言はわかっていても、がまくんはとても喜ぶのだった。



- 「どうしたんだい。がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」
- 「いま 一日のうちの かなしいときなんだ。つまり おてがみを まっじかんなんだ。そうなる といつも ほく とても ふしあわせな きもちに なるんだよ。」
- 「..ほく おてがみ もらったこと ないんだもの。」
- 「..ども かい？」
- 「だれも ほくに おてがみなんか くれた ことが ないんだ。」
- 「だつて、ほくが きみに おてがみ だしたんだもの。」

教科書掲載はこの「おてがみ」の第五話である。かえるくんはがまくんからもらったポタン付きの上着を着て、がまくん宅を訪問している。『ふたりはともだち』における三度目の訪問である。一度目は一緒に春を見つけようと誘いの訪問、二度目は、推察だが調子が悪いので助けを求めたくて、そして、この三度目はかえるくんの意志で、関係を修復する訪問だと考える。

がまくんは げんかんの まえに すわって いました。
かえるくんが やつて きて いました。

(傍線筆者)

この「やつて きて」を「通りかかるとして」(住田勝二〇一一)としているが、原文では came along となっている。通りかかるは happen to pass である。『広辞苑 第六版』(平成二十年 岩波書店)によれば、「やつてくる」は「こちらへ向かって来る」、「通りかかる」は「他へ行く途中、ちよとどこを通る」となっている。ここは、かえるくんがぶらぶらと通りかかったのではなく、明らかな目的をもって訪ねて来ているのである。それは、以下のように考えるからである。第四話の終わりの挿絵で、自分の衣服を持って帰っていくがまくんの後姿を、草の陰からそつと様子を窺うような眼で見ているかえるくんがいる。その時点でがまくんを痛く傷つけたとは思っていないように見える。自分が思わず笑ってしまった行為について謝罪など思いついていない。のぞき見している様子に描かれているのである。いっぽう、がまくんは先に示した「そうに きまつてるじゃないか。」と、頭をあげて見向きもしないで帰ってしまう。

それから、しばらくしてかえるくんは考え始めたに違いない。第四話と第五話の間である。

・がまくんは風邪を引いてしまったのではないか。

・がまくんは「そうに きまつているじゃないか」と言っただけであった。着替えもしなかった。どれくらい怒っているのだろうか。笑ったことはよくなかった。(かえるくんの失態である。)

・どうすれば、また一緒に遊べるだろうか。

・ぼくは、がまくんからボタンを縫い付けた上着を貰ったことがある。ぼくが拾ってあげたボタンも縫い付けてあった。

「すいえい」以来、音沙汰のないがまくんを訪ねる決心をしたかえるくんだと考える。だから、「やってきた」のである。

パジャマ姿のがまくんがポーチにうかぬ顔をして座っている。そこへやってきたかえるくんが、「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ かなしそうだね。」と声をかける。今までずっと「がまくん」と親しい呼び方だったのに、久しぶりだったのか、改まる必要があったのか、「がまがえるくん」と呼びかけているのである。(傍点筆者)

友情の証であるがまくんからもらったボタン付きの上着とい、**「がまがえるくん」**と呼んだことよって、この訪問は重要な訪問と考える。今まではずっと**「がまくん」**と呼んでいたかえるくんだった。春を探しに出かけるためにがまくんを起こそうとした彼は、なかなか起きないがまくんに「ぼく さびしいよ。」と気持ちを吐露している。それ以来、いつもふたりは友達として**「なかよし」**だった。再び**「なかよし」**になるために、「もらった上着だよ。忘れていないよ。」と誇示し、間柄を修復したかったと考える。

(2)かえるくんの「おてがみ」まで

ふたりの間には、これまで一度もスムーズなコミュニケーション、心を打ち明けての会話はなかったけれど、「かなしそうだね」

とがまくんの表情を察し、「うん そうなんだ。」と即座に気持ちを返している。そして、どんな気持ちになるか説明しているので、かえるくんはまたすぐにわけを尋ねている。このやりとりは今までなかったことで、住田(二〇一一)は「対話劇」と記している。

これについて考えてみよう。

がまくんの「かなしい」気持ちの最大限「ふしあわせ」は、「おてがみ」をもらったこと「がないことだった。

かえるくんは「一ども かい？」(強調点筆者)と尋ねると、**「置みかけるように」**「ああ。一ども。」**「だれも」**くれた ことがないんだ。」とがまくんは答えている。郵便受けを待ち続けているがまくんは、毎日むなししい思いをしているが、それでも誰かから手紙が来るかもしれないと期待をもって郵便受けを見て、待っているのである。一人ぼっちで孤独で、寂しい、悲しく不幸せな気分にかえるくんは寄り添って、ふたりは黙って玄関の前に腰を降ろしている。

ふたりとも手を組み、郵便受けを今か今かとかすかな期待をもって座っている。悲しみによる連帯といえよう。

一緒に座っている間、「だれも」の中に自分が入っていることに、かえるくんは気づいたはずだ。確かに一緒に春を探し、川で水泳をしたけれど、手紙をがまくんに出したことはない。自分が調子の悪いときは、お茶を入れ、お話を考えようとした優しいがまくん。上着をくれたがまくん。水泳でつらい思いをしたがまくん。させてしまった僕。がまくんは今日、率直に気持ちを打ち明けてくれた。

がまくんの「かなしい」「ふしあわせな きもち」の理由を知った今、どうするのがよいか。それは、がまくんの望んでいる手紙を出すことだ。すぐ家に帰ろう。

ここで演劇風に考えてみよう。

かえるくん下手に退場（家に帰る）。暗転。がまくんしよんぼりと一人座り郵便受けを眺めている。（スポットライト）いつぱうかえるくんの家、りっぱな机に向かい何か書いてる。（スポットライト）ふたりの動作だけにスポットが当たり、周囲は暗い。対照的である。かえるくんは何をしているのか、観客（読者）は思い巡らし、かえるくんががまくんを救う手立てに期待が膨らむ。照明が入る。がまくんの家に戻ったかえるくん。ベッドで昼寝しているがまくんに話しかける。窓のある壁の大道具が入る。かたつむりに手紙を託したかえるくんの自信をもった口調に對して、がまくんはすべて否定的である。（左表内、傍点筆者）

| | |
|---|---|
| かえるくん | がまくん |
| <ul style="list-style-type: none"> ・もう ちよつと まつて みたら… ・ひよつとして だれかが … ・きょうは だれかが きみに おてがみ くれるかも… ・だって、いま ぼく てがみを まっているんだもの。 ・きつと くるよ。 ・だって、ぼくが きみに てがみ だしたんだもの。 | <ul style="list-style-type: none"> ・いやだよ。…もう まつて いるの あきあきしたよ。 ・そんな こと あるものかい。 ぼくに てがみを くれる 人なんて いるとおもえないよ。 ・ばからしいこと いうなよ。… いままで だれも おてがみ くれなかったんだぜ。きょうだって おなじだろうよ。 ・でも きやしないよ。 ・きみが？ |

かえるくんの説得に對して、けんもほろろ、とりつくしまもない断定的な否定である。自己肯定感というけれど、「ぼくに てがみを くれる 人なんて いるとおもえないよ。」と、完全に自分を否定してしまっている。しかしながらいつぱうで、心の中で誰か出来ないかと待ち続けているという心の葛藤が推察できる。しかも、がまくんは一日二日待ったのではない。「あきあきしたよ」と答えるぐらい長く、そしてすっかりいやになつて自分の気持ちをかえるくんに正直に告白している。しかし、なかなか説得できない状況だ。かえるくんはかたつむりに託した、がまくんに初めて書いた手紙を今か今かと待っている。この状況も舞台にのせられる。かえるくんとがまくんの間で動きがあり、セリフが連続的でわかりやすいからである。

演劇的にまた戻って考えてみよう。
舞台はベッドでふて寝をしているがまくん。窓は客席に開いている。かえるくんは窓から見たり、身を乗り出してのぞいたりするのは三度、ベッドと窓を行ったり来たりしている。（推測）
とうとうがまくんは窓からのぞいてそわそわしているかえるくんの行為をいぶかしく思い、「かえるくん、どうして きみ ずっと まどの そとを 見ているの。」と尋ねるのである。窓に近づくとがまくん。「だって…」と答えるかえるくん。まだ否定する。半信半疑のがまくん、続いて「だって、ぼくが きみに てがみ だしたいんだもの。」間違いないよという表情でがまくんを見つめるかえるくん。

次の「きみが？」は半信半疑の言い方。「あつげに取られ、びつくり仰天、口を開けてかえるくんを見つめるがまくん。そして、我にかえり、「なんて かいなの？」と尋ねる。

(3) かえるくんの「おてがみ」

そのとき、ホリゾンにはかえるくんの手紙が実写される。感動的な文言である。三文。かえるくんはゆっくり心をこめて読む。

しんあいなる がまがえるくん。
ぼくは きみが ぼくの しんゆうで ある ことを
うれしく おもっています。
きみの しんゆう、かえる

がまがえるくんと改まった表現である。「しんあいなる」は英語ではよく使う表現だが、第五話の初めにがまがえるくんと呼びかけたかえるくんの心情を思い返すと、この手紙の書き出しはふたりの関係の動かぬ証拠と言えるだろう。

だが、今までの経緯からすると「親友」と言えるかどうか疑問である。ふたりの心の打ち解け合いに到達したので使ったのだろう。ローベルは「ともだち」次に「なかよし」、次の段階だから「しんゆう（親友）」としたのか。

原書の英語では、

'Dear Toad, I am glad.
That you are my best friend.
Your best friend, Frog.'

のようになつており、第一文と第三文はきまり文句なので、第二文は、甚くがまくんの心を打ったに違いない。訳者の三木卓は日本語に翻訳するとき、ここだけでなくあちこちで端的に優れた平明な表現をしていることがわかった。

がまくんがこの手紙の内容をかえるくんに読んでもらったと

き、「ああ」と声がもれる。「とても いい てがみだ。」と。それは、少し前にかえるくんに「かなしい」「ふしあわせな きもち」の理由を聞かれたときのやり取りでの「ああ。」「ども。」とは大違いである。それは、心から感動し、嬉しく、喜びの感嘆である。

(4) 「おてがみ」を待つことの意味

さて、このあと四日目にかたつむりが手紙を届けに来るまで「とても しあわせな きもちで」玄関に座っている。挿絵のふたりは寄り添い、肩を組み、優しい眼差で郵便受けを見つめている。前は口角で下がっていたのが上がっている。足もゆとりのある並び方で、憂鬱な座り方から一変している。ここは、小学二年生であっても、比較して違いを豊かに指摘するだろう。

がまくんは聴くだけの手紙の内容だったが、確実に来るという安心感と期待の幸せ、かえるくんはがまくんを喜ばせた幸せ、ふたりは届いた瞬間の感動を待つ幸せである。かえるくんにはがまくんの喜んだ顔を見る幸せもある。

このことは筆者の実践、単元「風―自然とともに生きる―」（平成二年一九九〇年十一月）で経験している。今では珍しくない風力発電機の記事を朝日新聞の天声人語（平成二年九月八日）で見つけたことから始まった。神戸大学発達科学部附属住吉中学校一年生と北海道寿都中学校一年生との手紙のやりとりである。附中から送った一人ひとりの詩のような手紙にこたえて、二週間のちに風力発電機の下で生徒と先生が子どもたちに手を振るビデオレターと一人ひとりに宛てた手紙を手にした喜びの歓声の教室風景を今も思い起こすことができる。二週間、他の学習材を学びながら、子どもたちから毎日毎日、返事が来たかと尋ねられた。待つことの日々の高まりから、子どもたちがどれだけ見も知らぬ友

からの便りを待ち望んでいたかを味わったのである。だから、この四日間は、ふたりの心の交流の時間となり、かえるくんの手紙の中の親友（「信頼できる親しい友」〔『広辞苑 第六版』平成二十年 岩波書店〕best friend になったと言えるだろう。

次に、単元を学習した生徒が、当時「待つ」から心の交流として得たものを振り返り（拙著『ことばと心を育てる』一九九二年 溪水社）に残しているので紹介したい。以下、抜粋である。

（※寿都：アイヌ語 葦の生えているところ）

A

神戸と寿都を結ぶ風の通り道が切り開かれてから、もう二か月以上にもなりますが、私は、その風の通り道が開かれてからというもの、毎日、「寿都では今、どんな風が吹いているのだろう」と気にするようになってきました。そして、寿都から返事が届いたときには、嬉しくて手が震えてしまいました。その震えた手から読み取った手紙には、寿都の様子や自己紹介が細かく書かれてあって、私は、「絶対、この人達との出会いを大切にしよう」と心に誓いました。その誓いを今でも忠実に守っています。そして、これからも、その誓いを守っていきたくと思っています。

（「すばらしい出会い」M女）

B

朝日新聞の天声人語の中のほんの一部分、「風の利用」。その対象となっていた寿都中学校と附中のささやかな友情。授業という勉強の、少しかた苦しい感じのものから、いつの間にか、あたたかい心と心の友達づくりのようなものに変わっていた。

今回の学習で一番心に残っていることは、遠く離れた二つの場所でも文字によって心を通い合わせたことだ。詩を書いて送れ

ば返事が返ってくる。いろいろ工夫して言葉を考えれば考えるほど、まるで、こだまのように相手のこめられた心が伝わってくる。

人と人との出会いというものは、本当に不思議だとつくづく感じた。お互いに仲良くしたいという気持ちさえあれば心と心はすぐにつながるのだと思う。どんなに離れた場所でも、たとえ会ったことがないとしても……。

この単元で学び取ったことは、この心のつながりということだ。神戸で感じた私達の気持ちが風のたよりにして運ばれ、また寿都で感じた彼らの気持ちが風に乗って運ばれてくる。ここで生まれた「出会い」を大切にしていきたいと思う。願わくば、いつの日か出会って、その場で話したい。

一つの小さな新聞記事から生まれた不思議なつながり、私にとって、もう二度とないかもしれないこの体験。

寿都の皆さん、いつまでも温かい友情を。

（「心と心をつないで」H女）

実践の場では、四日の間、かえるくんがまくん、それぞれ何を考えていたのだろうと想像させることが可能である。また、期待したり、疑ってみたりする心情の変化の語彙の学習もできる。

最後に、かたつむりがもって来た手紙の宛名は小さな文字で見えにくかったが、「かえるくん」に相当するALLETTER FOR TOAD だった。（参考資料⑧）

三、「親友」について

小学二年生で、「お手紙」の中の「親友」について筆者は次の三点についてこだわっている。

1. 親友とはどういう友達をいうのか。
2. 小学二年生に親友の意味がわかるのか。
3. 「おてがみ」(「お手紙」)の時点でふたりの関係は親友といえるのか。

新・旧の学習指導書には明確な説明はない。新しい学習指導書では「親友の意味を確認する」と記述されているだけである。ローベルは『ふたりはともだち』(1970)に続いて『ふたりはいつしょ』(1971, 1972)を書いている。そのあと『ふたりはいつも』(1976)、『ふたりはきょうも』(1979)がまくんシリーズを完了している。出版年に差があることは、アーノルドが反響を考え、それぞれの特徴や関係を深めたのではないだろうか。もっと追究することにした。

アーノルドは一九三三年に生まれ、一九八七年に没している。五十四歳という短い生涯だった。『ふたりはともだち』(1970)が出版されたのは、彼が三十七歳の頃である。

娘エイドリアンのロングインタビュー(参考資料⑦)によると、彼女が十一歳くらいの頃、ヒキガエルの赤ちゃんを父に見せた二年後に出版されたとある。つまり、三十五歳の父親が子どもとの生活から着想を得た物語ということである。娘の年齢を考えてみると、「親友」という言葉と実態が過不足なく、ストンと胸に落ちてくる。後に二冊が出版された時期、ちょうど娘は十七歳ぐらいの多感な頃で、父親として意識もしたかもしれない。残り三冊からほんとうの「親友」への関係を探した。

次に目次をあげ、際立つ話のところには説明を加えている。

1. 『ふたりはいつしょ』(1971, 1972)

目次

よていひょう

がまくんの作成した予定表に協力

はやく めを だせ

クッキー

こわくないやい

がまくんの ゆめ

したかえるくん(「ぼく うれしいよ」)。

たねの成長のために努力したがまくんをねぎらうかえるくん。

おいしいクッキーを作ったがまくんにかえるくんが食べ過ぎない意志力を教える。

本から学んだ勇氣を實際の場で試してふたりとも勇敢だったことを味わった。

がまくんは夢の中でかえるくんに自慢し続けたことで友を失うこと不安を知る。

相手が大事な友であることを知る。「がまくんの ゆめ」では、「ひとりぼっち」になる不安の表現が出てくる。

(例)がまくんは、かえるくんを失ってしまうかもしれないという恐怖を覚える。しかし目を覚ますと、かえるくんが目の前にいたため、ほっと胸をなでおろす。

「かえるくん」「ぼく、きみが きてくれて うれしいよ。」



2. 『ふたりは いつも』(1976)

目次

そりすべり

そのの かどまで

アイスクリーム

おちぼ

クリスマス・イブ

叙情的な「そのの かどまで」、相手を思いやつの行為が無駄骨でも特に心が温かくなる「おちぼ」、暖炉を囲んで夜がふけていく「クリスマス・イブ」。ふたりの静かな心の充足感で第五話が終わる。

・「いちぼん なかよし」のかえるくんから教わったそりすべりなのに、一人よがりのがまくんの性格が出てしまう。

・雨に振られたがまくんはかえるくんの家でお茶とお菓子を御馳走になりながら、春の到来の話から春を探すふたり。

・アイスクリームのお化けになったがまくんをねぎらい、ふたりで買って木陰で食べる話。

・相手を思い芝生の落葉かきをするが、風によって元の木阿弥。しかし、ふたりとも充足感で幸せになり眠りにつく。

・クリスマス・イブの晩、かえるくんの身を案じた後の来訪に時計のプレゼントをもらい、楽しいイブになったふたり。

3. 『ふたりは きょうつむ』(1979)

目次

あした するよ

たこ

がたがた

ぼうし

・散らかっている家を片付けたがまくんに、あしたの期待をはぐらかされたかえるくん。(またベツドに戻ったがまくん)

・何度やつても上がらないたこを見てこまどりに笑われるが、かえるくんの熱意で空のてっぺんまで上がっていく。

・かえるくんの小さい頃の体験を聞くがまくん。繰り返しの表現が面白い。

・かえるくんから誕生日祝いにもらった大き過ぎた帽子は、かえるくんの機転でびったりになり満足したがまくん。



ひとりきり

かえるくん宅を訪問したがまくんは、かきつけを見て探し回った末、川の中の島でふたりきりの本当の親友になる話。

がまくんは片付けが下手で寝るのが好き、忍耐力もなさそう、しかし、かえるくんのことを心から大事な友達と思っているこの第四巻の第五話で、私はほんとうの親友になったことを示していると考えます。かえるくんがなぜひとりきりになったのかを説明することは感動的である。



4. ほんとうの「親友」
第五話「ひとりきり」のかきつけ

しんあいなる がまくん
ほくは いません。でかけています。
ひとりきりになりたいのです。

がまくんはひとりきりになりたいというかえるくんの気持ち
がわからない。かえるくんの「ひとりきりになりたいのです。」
(強調点筆者)の「のです」は強い意志・理由が感じられる。彼
はなぜひとりきりになりたいのか。がまくんは今まで一緒に過
した森や野原を探し、川まで行く。川の真ん中の島に、かえるく
んはひとりきりで背中を見せて座っていた。その後ろ姿を見て、
かわいそうに思い悲しんでいると判断するのも無理はない。元氣
づけ喜ばせるためにサンドイッチとアイス・ティを作り川まで戻
って、上着までぬいで旗のように振り回し、大声で叫ぶ。「きみ
の しんゆうの がまがえるだよ！」と叫ぶ。友達でなく親友
(best friend)と言っている。なんとしてもかえるくんを慰めた
いという気持ちが伝わってくる。幸いにもかめがやってきて島に
送ってくれる。

たぶん かえるくんは
ほくに あいたくないんだよ。
この ほくつていう ともだちなんか
もう いらないんだ。
ほくの した くだらない こと
みんな ごめんね。
ほくの いった つまらない こと
みんな ごめんね。
おねがだから また
ともだちに なっておくれよ！

かめは、「かえるさんが ひとりきりになりたいなら、「どう
して そっとしておいてあげないんです。」と言っている。状況

を推測した大人の意見である。

右の表内にあるがまくんのことばに対して、「ええ。そうかも
しれませんね。」と、冷たい相づちである。

かえるくんを失う怖さから左の表内のことばを叫んでいる。今
までのがまくん自身の言動を謝罪しているが、そんなことはない。
時には、昔のがまくんが出てくる(例 よていひよう そりすべ
り あしたするよ)が、ふたりでクッキーやアイスクリームを食
べ、そりすべりやたこ上げをした充足感が深まっている。私は「は
やく めを だせ」や「そのの かどまで」「おちば」「クリスマス
ス・イブ」「ぼうし」が好きである。相手への自然な気づかいに
温かさがある。特に、「クリスマス・イブ」の終わり方は次のよ
うになっている。

がまくんは かえるくんの プレゼントを

あけてみました。

きれいな あたらしい とけいでした。

暖炉の棚に置かれた時計の針の進む音、燃える炎、ともされた
ろうそく、暖かい部屋、ゆったりした上等の椅子等、申し分のな
い空間で、すばらしい訪問者(かえるくん)と、時をともに過ご
している。「すぎていくのです」とあるように、がまくんとか
えるくんの関係性は少しずつ交わされる会話も穏やかで、雪の中
をやってきたかえるくんへのねぎらいや雪の中を歩いてきてた
どりつくまでの苦労も笑いの一つとして夜が更けていくことが
想像できる挿絵である。

この第三巻第五話の終わり方は、第四巻第五話に通じるのであ
る。そして振り返ってみると、がまくんのことばは直接的、野球
でいうと直球を投げている。かえるくんは婉曲的といえよう。

かえるくんはふたりの関係をしみじみ思い返し、川音を聞き、
川面を眺め、風に吹かれながらかみしめた思いをがまくんに告げ
たと思う。

私自身、山から下山してくる途中、吹き上げてくるさわやかな
風や日の光に至福のときを思うことがあったので、かえるくんの
次のことばは胸に響き、熱くなった。

ぼくは うれしいんだよ。

とても うれしいんだ。

けさ めを さますと

おひさまが てっぺいて、

いい きもちだった。

じぶんが 一ぴきの かえるだ ということが、

いい きもちだった。

川に落として濡れてしまったサンドイッチを食べ、ふたりは鳥
で過ごす。後姿の背中に手が回された挿絵は、ゆるぎのない信頼
関係が表れている「親友」の姿であった。

作者のアーノルドも次の文で第四巻第五話を終えている。私自身、「親友」を追究した長い旅を終えた気分である。

ふたりきりで すわっている
かえるくんと がまくんは
しんゆうでした。

最後に、参考資料のから娘が語る、絵本の魅力、特に友情関係の「複雑さ」について語っているので、少し長いけれど挙げておきたい。

「がまくんとかえるくん」がこれだけ長い間、人々を魅了するのは、まじめで、なおかつ愉快な2人の強い友情関係が魅力なのではないでしょうか。お話には、よい友だちであり続けることの「複雑さ」、そして物事はいつも思うようにはならないもので、たとえうまくいかなないことがあったとしても友だち同士なら乗り越えられるということが語られています。読者はそこに共感するのでしょう。誰かを好きになつて、相手を許し、相手について日々新しいことを知り、自分についても何かを学ぶ。父の本に登場するキャラクターは、相手を見下すようなことがなく、自分を偽らない。そしてお話は、それぞれが自己実現を果たすドラマなのです。怖がったり、怒ったり、恥ずかしうと思ったり、馬鹿なことをしたり、心が傷ついたりしたとしても大丈夫、ということ伝えていきます。子どもであることの難しさを、父はよく理解していたのだと思います。子どもは全ての物事を大人と同じように感じとるけれど、感じ方が大人よりも強烈で、経験が浅いがゆえにそれが、普通の感覚「なんだと知るすべがありません。父はそういう子ども時代に経験する

感情を、優しく、軽いタッチで肯定してあげているのだと思います。
ます。
(傍線筆者)

四、おわりに「親友」の旅を終えて

指導助言をするために、下調べをしたことがこの旅の始まりだった。『ふたりは、ともだち』を買い求め、疑問を解決するために残りの三冊、英語の本も買った。旅はどんどん深まった。新型コロナウイルスの大流行で、外出自粛となり図書館が閉館となった。それで、スーパーマーケットに入る書店が頼りで、それでも本は流通していて、早く手元に届いた。参考資料が私としての精一杯の資料である。

わからないことは、実践者の神戸大学附属小学校の藤中寛子教諭に何度も電話で尋ね、新たな資料も提供してもらった。アーノルド・ローベル自身の朗読が聴けたのも、彼女のおかげである。また、住田勝氏の発表資料もありがたかった。特に、児童が研究発表会までどんな反応していたかという話や、がまくんにかえるくんが手紙を書いていなかったことに気づいていた児童もいたという話も参考になった。さらに、藤中教諭自身が「すいせい」で気になる挿絵(草の陰からのぞくかえるくん)があり、それもこの教材(作品)研究に役立った。

またいっぽう、英語ではどうかという気になったのが親友の表現である。日本語と英語の比較をしての結論は、厳密に区別はできないことだった。

『広辞苑 第六版』(平成二十年 岩波書店)では、「心友」「親友」は、それぞれ次のように示されている

心友 心を許し深く理解しあっている友
 親友 信頼できる親しい友、仲のよい友人、無二の親友、
 かけがえのないこと

また、参考資料⑧では次のように示されている。

なかよし good friend
 親友 best friend close friend

アーノルド自身、最後の「ひとりきり」では close friend を使っているが、彼の目から見たふたりの姿と理解したい。

英語表現については、友人で絵の友達である、元京都外国語大学英語科講師の森陽子氏にお世話になった。彼女は英語科教育法を教えていたので、教材としてこの四冊の英語の本をもっている。この時期なので、これまた何度も電話でやりとりをし、親友を一緒に考えてもらった。

ここに、お二人に深甚なる感謝の意を表したい。

最後、娘エイドリアンの言葉にある友情や複雑さは、私の「親友を探る旅」で書きながら理解し、いつのまにかがまくんやかえりくんを応援するようになってしまった。最後のかえりくんの「ひとりきり」で感動したのは、同化かもしれない。

作品のアメリカの出版年を書いているとき『世界史年表・地図第十六版』（平成二十二年 吉川弘文館）で、アメリカの社会情勢が気になり始めた。出版年の前が執筆になるので、一九六五年頃から次に示したい。

一九六五年二月 米空軍の北ヴェトナム爆撃（北爆）始まる
 八月 黒人投票権法成立

一九六八年四月 黒人運動指導者キング牧師暗殺事件
 六月 ロバート・ケネディ暗殺事件
 一九七〇年四月 カンボジア政変に介入、米軍出撃
 一九七五年四月 米国のヴェトナム介入終了

アーノルド（一九三三～一九八七）はこの情勢を知らないはずはない。特に、一九六八年は世界的にも大事件である。黒人人種差別反対の旗手だったキング牧師の暗殺に続いて、ケネディ大統領の実弟が暗殺された衝撃的な年であった。作者の心の中には、がまくんとかえりくんを象徴に描き、たとえ、いろいろな事件があっても、種類の違うかえり（人間）だとしても友情は育まれることは可能だという想いをもっていたと思うのである。

がまくんを「存在に関わる苦悩」（住田二〇一一）と表現しているが、潜在的意識があつたと考えると、アメリカの当時の社会と重なってくるのである。

アメリカで一九七〇年に出版されてから、今年で五〇年になる。アーノルド・ローベル五〇周年ということで、何か考え、出版の予定だと聞いたが、新型コロナウイルスが猛威を振るい、脅威的な状況でどうなるか分からないということだ。

いつか、それが日本にいる私たちの手元に届くことを楽しみにしたい。

実践参考資料

- ・ A・ローベル「お手紙」『文学の授業づくりハンドブック』授業実践史をふまえて（第一巻）小学校・低学年編／特別支援編』（平成二十二年 溪水社）
- ・ 「」。と言いました。ばかりじゃつままない『国語教育相談室 98号』（令和元年 光村図書）